

コミュニケーション能力と臨床判断能力の向上を 目指した在宅看護学における遠隔実習

吉田 令子、武田 保江
(看護学部看護学科)

Improving Communication Skills and Clinical Judgment Skills Remote Training in Home Health Care

Reiko YOSHIDA, Yasue TAKEDA
(Department of Nursing, Faculty of Nursing)

2022年に向けた看護基礎教育のカリキュラムの構築に向けて、地域包括ケアを担うこれからの看護職に求められる能力が習得できるよう、ICTの活用による遠隔実習を構築した。遠隔と臨地での実習を統合して授業設計し、学習目標・教育内容・評価方法の3要素を含むインストラクショナル・デザインとした。今回の在宅看護領域の遠隔実習の試みにより、ICTを活用した看護教育の新たな可能性を見出す機会となった。今後の実習におけるICTの活用の具体例として(a)繰り返し視聴が可能なオリエンテーション資料の作成と配信、(b)いつでも視聴可能な10分程度の教材の作成と配信、(c)遠隔によるカンファレンスの実施などが効果的であると考えられる。そのための課題として施設でのWi-Fi環境の整備やプライバシー保持のためのルール作り、指導者や学生の情報リテラシー教育が必要となる。

キーワード：在宅看護学、実習、遠隔教育、インストラクショナル・デザイン、アクティブラーニング

はじめに

わが国の看護を取り巻く状況は、医療ニーズの増大、高度化などにより大きく変化している。また、団塊の世代が75歳以上となる2025年をめぐりに地域包括ケアシステムの構築が推進されており、それを担う保健福祉医療における人材の確保や育成が課題となっている。これらを受けて、2022年までに看護基礎教育における新たなカリキュラムの構築が求められている。2022年からの看護基礎教育においては地域包括ケアシステムの概念と実践への理解を深め、コミュニケーション能力と臨床判断能力の向上が重点課題として示された。(厚生労働省2019)。

筆者らは2022年度から実施される新カリキュラムの要となる在宅看護の領域に焦点を絞り、求められる能力の習得やInformation and Communication Technology(情報通信技術:以下ICTとする)教

育の環境整備に向けた学習方法の検討を行っている。

2020年3月から、新型コロナウイルスの影響を受けて多くの教育機関で休校等の対応がとられてきた。その後、感染予防の対策をとりながら遠隔や対面での授業が再開されつつある。近年、学生の主体的な学びを支援するICT教育の推進が図られてきたが、今回の新型コロナウイルスの流行により、数多くの教育機関で遠隔授業を実施するようになった(文部科学省2020)。

こうした危機的状況の中で、いかに学生の学修を支援するのかを検討し、2020年度6月～7月の実習をICTの活用による遠隔実習とした。また、遠隔と臨地での実習を統合してデザインし、一貫した評価方法を用いる授業設計とした。今回のICTを活用したコミュニケーション能力と臨床判断能力の向上を目指した在宅看護学における遠隔実習について振り返り、その実践内容を報告する。

1. 在宅看護学領域における教育の実際

(1) 看護学基礎教育において在宅看護学で教授すべき内容

看護師養成所等で教授すべき内容は、看護師養成所指定規則やコアカリキュラム、看護師国家試験出題基準によりその概要が示されている。各養成機関ではそれに基づいてカリキュラムを作成し、担当領域ごとにシラバスを作成している。本学の在宅看護領域においても、指定の単位数や時間数に応じ、コアカリキュラムと看護師国家試験出題基準に基づいて具体的に教授すべき知識と技術、概念を精選している。

さらに、在宅看護の基盤となる考え方として、在宅医療の主体は、療養者本人となる。在宅医療の利用者は医療を受けることを第1に考えているのではなく、その人の生活の目標が達成され、満足した人生が送れるように、自ら医療サービスを選択し、そのサービスの受け手となる。在宅療養者に看護を実践するためには医療的な判断力や技術・見識に加

え、利用者との信頼関係を築き、利用者の生活及び人生を理解し、継続的に支援する力が必要となる。(川村 2017)

2. 本学における在宅看護学教育

(1) 在宅看護学の授業構成

在宅看護学では、1年次後期に、在宅看護の対象理解と関連制度、在宅看護に関する重要概念を学ぶための「在宅看護学概論」、2年次秋学期に、在宅看護の対象者の日常生活援助と医療的ケアを学ぶ「在宅看護方法論Ⅰ」、3年次に実習前の集中講義として、疾患を抱えて在宅で暮らす療養者の理解と課題解決能力を養うための看護過程を学ぶための「在宅看護方法論Ⅱ（13期生までのカリキュラム）」を修得し、領域実習に臨んでいる。(図1)

(2) 在宅看護学における実習の構成

本学の在宅看護学領域における遠隔実習と臨地実習について、本学のディプロマポリシー及び、国際生活機能分類:International Classification of

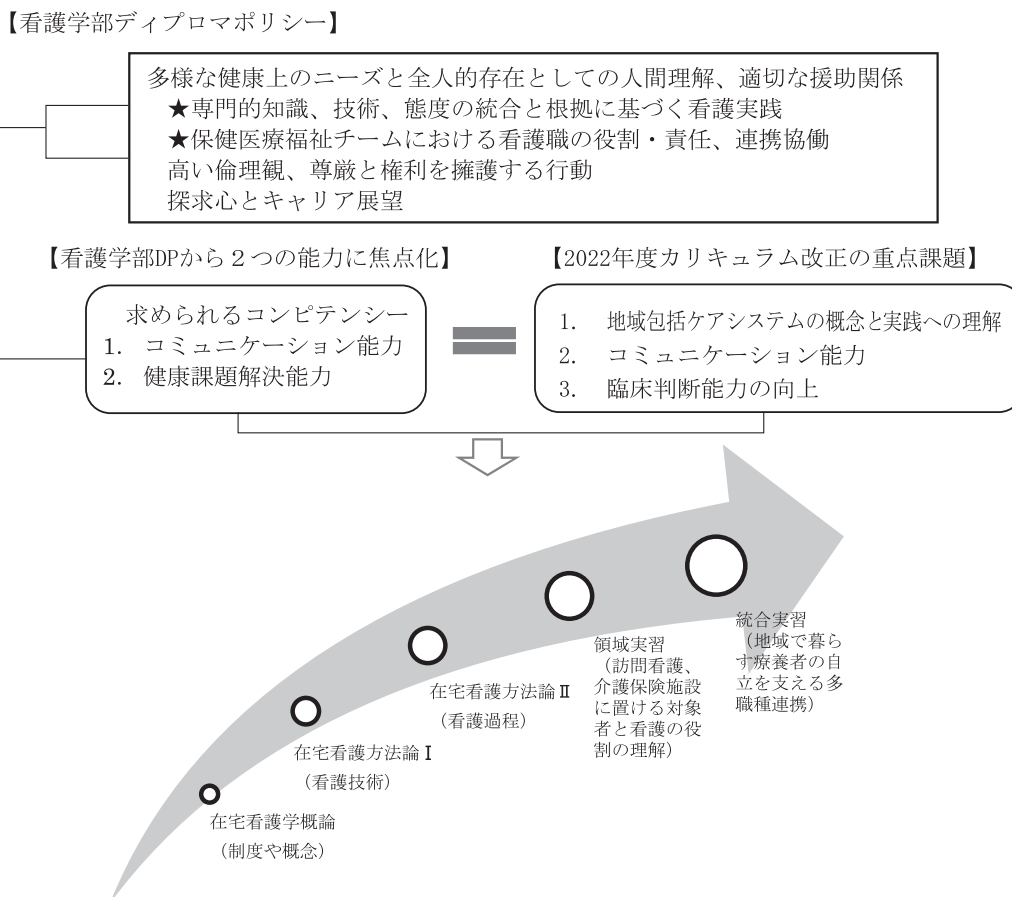


図1 本学看護学部のディプロマポリシーと在宅看護関連科目の構成

Functioning, Disability and Health, (以下 ICF とする。) の考え方を基盤とした在宅看護学実習目標を下ろし、実習目標達成に向け実習計画を立案している。著者らは「対象者の生活機能向上、また社会参加促進や、社会的支援などのシステムの構築を目指し、多職種間の共通理解のツールとなる生活機能モデルである」として在宅看護学の教育に活用している。

ICF は、人間の生活機能と障害の分類法として、2001 年 5 月、世界保健機関総会において採択された。この特徴は、これまでの WHO 国際障害分類 (ICIDH) が障害などのマイナス面からとらえていたのに対し、ICF は、生活機能というプラス面からみるように視点を転換し、さらに環境因子等の観点を加えた。ICF は「健康の構成要素に関する分類」であり、新しい健康観を提起するものとなった。生

きることの全体像を示す「生活機能モデル」を共通の考え方として、さまざまな専門分野や異なった立場の人々の間の共通理解に役立つことを目指している (厚生労働省 2002)。

在宅看護学は、現在統合科目としての位置づけであり、実習においても同様となる。本学では、順序性として老年看護学実習を終えてからの実習となるようスケジュールがされている。必ずしも全領域を終えた後に位置づけられているのではなく、3 年次の 6 月～12 月の間で在宅看護領域の実習を履修している。実習期間は、2 週間であり、そのうち学内日を 3 日間設けている。第 1 週目は、訪問看護ステーション実習、第 2 週目は介護保険施設での実習となっている。初日にオリエンテーション、6 日目に訪問看護実習のまとめと施設オリエンテーション、最終日に 2 週間のまとめを学内で実施している。(表 1)

表 1 在宅看護学領域実習スケジュール (2019 年度の例)

	月	火	水	木	金
1 週目	<学内> オリエンテーション 対象者の疾患や関連制度等の調べ学習	訪問看護 ST オリエンテーション 情報収集 同行訪問 振り返り	訪問看護 ST 情報収集 同行訪問 振り返り	訪問看護 ST 情報収集 同行訪問 振り返り	訪問看護 ST 情報収集 同行訪問 カンファレンス
2 週目	<学内> 訪問看護の学びを共有 施設別オリエンテーション 調べ学習	介護保険施設オリエンテーション 居宅・施設サービスの実際	介護保険施設居宅・施設サービスの実際	介護保険施設居宅・施設サービスの実際 カンファレンス	<学内> まとめ 個別面接 課題提出

(3) 遠隔実習の経緯と考え方

2019 年度の実習では 2 週間の臨地実習を実施していたが、新型コロナウイルスの影響により 2020 年度は春学期の臨地実習の実施が困難となった。そのため、春学期に遠隔実習、秋学期に臨地実習を各 1 週間実施することとなった。(表 2)

筆者らは、在宅看護学領域の実習を「学生自身が主体的に自身の課題を明確にし、必要な知識を習得した上で、訪問看護や介護保険施設などの臨地で学ぶ実習プログラム」と定義した。そのうちの遠隔実習については、「実習目標の達成に向けて、教材の提示、個別学習、グループワーク、成果発表、ロールプレイングなどのアクティブラーニングを組み合わせた ICT を活用した遠隔による実習プログラム」

と定義した。

また、実習目標が遠隔と臨地の実習で達成可能なものであるかを検討し、1 週間の遠隔実習と、残りの 1 週間の臨地実習で達成可能と考えられる目標を振り分けた。(表 3)

さらに、遠隔実習で達成すべき目標に合わせた実習プログラムを検討し、学生の遠隔実習における学修を 4 つのステップで計画した。(a) 思考力をはぐくむための専門的知識の理解、(b) 根拠に基づくアセスメントと課題解決能力の育成、(c) 実習場所の地域包括ケアシステムの関連機関の機能、多職種連携の理解、(d) 知識や課題解決能力を統合したプレゼンテーション能力と意見交換による説明の能力、聴く力の向上である。(図 2)

(4) 遠隔実習の実施内容と学生の反応

(i) 遠隔実習第1日目は、「思考力をはぐくむための専門的知識の理解」のために1年次に履修した在宅看護概論の中から重要な概念や制度について、国家試験出題基準に基づき項目を精選しチェックリストを提示した。各個人で、事前学習や授業ノートを確認し不足をチェックした。不足している項目についてグループ内で分担して復習と調べ学習を行った。午後に学びの共有の時間を設け発表や質疑応答を行った。

学生からはあいまいな知識や新たな制度の知識や情報を確認することができたとの意見が聞かれた。

(ii) 遠隔実習の2日目は、「根拠に基づくアセスメントと課題解決能力の育成」として、2年次に履修した在宅看護方法論Ⅰの在宅看護技術の内容を国家試験出題基準から精選したチェックリストを提示した。各個人で、事前学習や授業ノートを確認し不足をチェックした。不足している項目についてグループ内で分担して復習と調べ学習を行った。午後に学びの共有の時間を設け発表や質疑応答を行った。

かなり広範囲な内容であるがグループで助け合い事前学習の不足を補うことができた、人に説明する

ことで自身の理解が不十分であったことに気づくことができた、他者の発表を聞いてどのように説明すればわかりやすい説明ができるか大変参考になったとの意見が聞かれた。

(iii) 遠隔実習の3日目は、3年生の集中講義で履修した在宅看護方法論Ⅱ（看護過程）の事例を1つ選定し、看護計画の立案をグループで行った。遠隔授業での事例展開は個人ワークのみであったが、グループで共有することで自分の不足に気づき具体的なアイデアや新たな視点を共有することができたとの意見が聞かれた。また、他のグループの発表を聞いて、優先順位の違いについてそれぞれの考えの違いと、そう考えた理由を知り、課題の要因や根拠について深く考える機会となったなどの意見が聞かれた。

(iv) 遠隔実習の4日目は、実習施設の保健・医療・福祉・行政の機能について調べ学習を行うこと、5日目のロールプレイングのシナリオ作り、多職種連携をイメージするための動画の視聴を課題とした。学生たちは、地域の中に様々な機能があり、一定の人口毎に機関や事業所の数が定められていることを改めて知り、それらが計画的に整備されていることに気づくことができていた。

表2 遠隔実習スケジュール

	月	火	水	木	金	提出物と期限
午前 9時から	9:00～9:30 webcom に入り資料を確認する 9:30zoomに参加オリ エンテーション ・実習の変更点と遠隔 実習について ・介護保険施設配置 ・グループを2つにチ ーム分けする。リーダ ーを決める。 ・午後の発表の役割分 担 ・概論の復習（在宅看 護に重要な用語につ いて、個人で課題を 行う。	9:00～9:30 webcom に入り資料を確認する 9:30 zoomに参加リー ダーは出欠確認と報告、 各自で目標をグループ 番号を入れてチャット に記入 在宅看護方法論Ⅰの 内容から精選（在宅看護 技術の復習、解剖生理 を含む）（専門家チ ームで分担、共有し 内容を理解する）	9:00～9:30 web comに入り資料を確認 する 9:30 zoomに参加リー ダーは出欠確認と報 告、健康チェック、目 標をチャットに記入 課題について調べ学習	9:00 zoomに参加 リーダーは出欠確認と 報告、健康チェック、 目標をチャットに記入 課題について調べ学習 多職種連携の実際、制 度の活用、地域別（介 護保険施設の所在地） の情報にアクセスす る。）グループで共有 事例1の状況設定の課 題①～④チーム内で役 割を決める。	9:00～9:30 チーム で打ち合わせ（line等） 9:30 zoomに参加、リー ダーは出欠確認と報告、 健康チェック、目標を チャットに記入 9:45～これまでの学 習を統合し事例1の状 況設定問題：シナリオ をもとに、2グル ープ同時進行のzoomで ロールプレイング（リ ハーサル15分、観察 者のコメント5分、本 番15分、教員から10 分）計45分×2回	③行動計画表に一日の 行動内容と学び。明日 の課題を記入する。翌 日8時までにWebcom 提出 ①実習評価表 ⑩健康管理表 ⑪看護計画書（全ての 課題の計画と、1つ以上 の実施評価まで）・療養 上の課題を 土曜日18時までにWe bcom提出、ネットが 込み合うことや、サ ーバダウンに備え早 めに順次提出すること。
午後 16時 10分まで	15:00～zoomに参加、 チームごとに発表 成果をグループで共有	15:00～zoomに参加、 チームごとに発表 成果をグループで共有	15:00～zoomに参加、 チームごとに発表 成果をグループで共有 4日目の課題と5日目 状況設定の提示	シナリオ作成 webcom に提出（23時まで） 16時10分チームリー ダーは担当教員にメ ールで進捗状況、実習終 了を報告	事例1の看護計画実施 と評価（個人ワーク） 15:00～zoomに参加 実習評価表に沿って 1週間の学びと自己の 課題を発表 アンケートの記入	
課 題	遠隔の時間内にできなかった事前課題は夏休み中に完成させ、ファイルに閉じる。					
提出物	行動計画表（翌朝8時まで）	行動計画表（翌朝8時まで）	行動計画表（翌朝8時まで）	行動計画表（翌朝8時まで）	行動計画表（翌朝8時まで）	

表3 実習目標と評価項目

評価項目	
1	在宅療養者とその家族の療養生活における健康上の問題、および生活について理解することができる。
	1) 在宅療養者の疾病と障害および生活状況を説明できる。
	2) 在宅療養者の家族の健康状態と生活状況を説明できる。
2	在宅療養者と家族の在宅ケアニーズを明確にし、根拠に基づいた援助を展開できる。
	3) 在宅療養者と家族のそれぞれの役割と機能が説明できる。
	4) 在宅療養者と家族の健康状態や生活状況についてアセスメントできる。
3	訪問看護ステーションの機能と訪問看護師の役割を理解することができる。
	5) 在宅療養を継続するために必要な支援や課題を抽出できる。
	6) 在宅療養者と家族の意思や価値観を尊重した援助を考慮することができる。
	7) 訪問看護ステーションの特徴と機能を説明できる。
	8) 訪問看護制度の法的枠組みとサービスの仕組みについて説明できる。
4	介護保険施設やそこで生活する療養者の特徴、および看護の役割が理解できる。
	9) 在宅看護の特徴と看護の実際を説明できる。
	10) 在宅ケアチームの一員としての訪問看護師の役割と活動が説明できる。
	11) 在宅看護における生活上の安全と災害時の健康危機管理について説明できる。
	12) 介護保険施設の役割・機能について説明できる。
5	地域包括ケアシステムの中で関係機関、多職種、地域住民の組織などとの連携および調整やマネジメントについて考察できる。
	13) 介護保険施設で提供されるサービスの種類と内容について説明できる。
	14) 介護保険施設を利用する療養者(入所・通所)の特徴や生活状況、思いを知ることができる。
	15) 介護保健施設における看護の役割が説明できる。
	16) 介護保険施設における多職種連携について説明できる。
6	学習者として、また在宅ケアチームの一員として活動するために責任ある態度と倫理観を養う。
	17) 療養の場の移行に伴う看護(地域連携クリニカルパス・退院支援など)が説明できる。
	18) 在宅療養者や施設利用者が暮らす地域や施設の特徴を説明できる。
	19) 実習で学んだ在宅サービスと施設サービスの種類と機能について説明できる。
	20) サービス担当者会議などでの調整や連携の実際を説明できる。
	21) 地域包括ケアシステムの中で関係機関、多職種、地域住民の組織の連携の実際について説明できる。
	22) 自己の学習課題を明確にし、主体的、かつ計画的に取り組むことができる。
	23) 個人情報保護や守秘義務を遵守できる。
	24) 自己の健康管理ができる。
	25) 他者の意見をよく聞き、協同しながら実習を進めることができる。

*白地部分は遠隔実習、灰色部分は臨地実習で到達すべき目標とした。

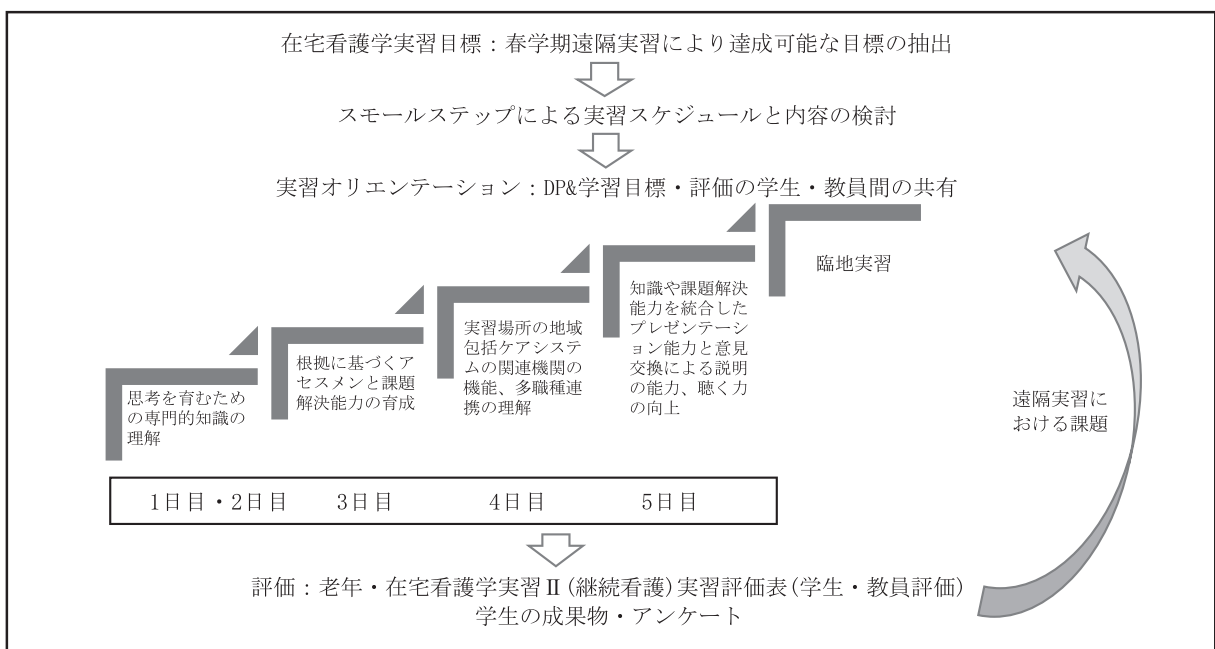


図2 春学期遠隔実習における実習目標達成に向けたステップ

(v) 遠隔実習の5日目は、それまでの概念や知識、自分たちが立案した看護計画を統合し、与えられた状況設定課題に対応したシナリオに沿って多職種連携の場面のロールプレイングを実施した。約20分間のロールプレイングのリハーサルを行い、観察者からの助言をもらい修正を加えて、再度20分間の実施を行った。

同じ内容を2回行うことで、実施者からは、1回目のリハーサルでは緊張して早口になり、対象者の反応を十分に受け止められていなかったが助言を受けて、2回目の実施では、対象者の反応を十分に確認することができた。高齢の対象者に専門用語を使わずにわかりやすい言葉に修正できたといった意見や、観察者からは最初は気づかなかった細かい配慮や工夫が2回目には気づくことができ、理解しやすかったとの意見があった。

これらの課題を経て最後に5日間の遠隔実習のまとめを行い、1年次からの学修の振り返りを行い多くの課題があったがグループで助け合い知識が得られたこと、グループで共有することで自分にはなかった視点を得たこと、他のチームと成果を共有しより深い対象理解ができたこと、コミュニケーションやチームワークの重要性を改めて実感したとの意見が聞かれた。

(5) 遠隔実習の課題への対処と学生の反応

遠隔実習という初めての試みに、筆者らは試行錯誤の繰り返しであった。特に課題であったのは、(a) 学生のネット環境の未整備 (b) e-learning システムのトラブル (c) グループワークや学びの共有が円滑にできるのか (d) 看護過程の実施（ロールプレイング）が可能かどうかであった。

(a) 学生は自宅で Wi-Fi 環境があるものがほとんどで、パソコン以外にもタブレット端末やスマートフォンを駆使して、遠隔実習に参加し課題を提出することが出来ていた。

毎回20数名中1～2名の学生は、ネット環境が一時的に悪くなることがあったが、グループメンバーと line などを使いサポートし合っていた。

(b) e-learning システムのトラブルはアクセスが集中する朝9時や土曜日の課題提出の夕方に繋がりにくくなる状況があった。この場合は学生に落ち着い

て教員にメール連絡をするよう伝え、グループ代表者からメンバーに教員からの指示や連絡を伝えてもらうなどの対処により、大きな混乱はなく、資料配布や課題の提出を行うことが出来た。当初、課題提出を22時としていたところ深夜に学生からの問い合わせメールが頻繁に来るため、提出時間を18時に変更するなどの対応を行った。

(c) 実習の方法として、個人ワークとグループワークを併用した。各自が行った学びを共有し、互いの気づきや理解を補い合うグループダイナミクスの活用とグループメンバーが助け合いながら実習を乗り越えられるように設計した。Zoom 内で20数名だと意見や質問が出ない学生達も4名程度のチームを組み2～3チームで発表と観察、ディスカッションを行った。小人数になると緊張感が解け、感性豊かなよい気づきを発言する様子が見られた。学生たちは回数を経るごとに主体的にカンファレンスの進行役を務めることが出来た。また、最終日のディスカッションでは、グループメンバー同士の意見から、コミュニケーションの重要性に気づき、それを深めるために「信頼関係を築くためのコミュニケーションとはどのようなものか」をテーマに話し合う様子が見られた。

(d) 対象者の課題解決に向けたPDCAサイクル(看護過程)を展開し、その総仕上げとして、状況設定課題に応じたシナリオ作り、ロールプレイングを行い、実施評価までを課題とした。学生たちはロールプレイングの実施後の振り返りや観察グループからの助言、他のグループの観察により、その計画が個別的でないことや具体性に欠けることに自ら気付くことが出来ていた。文章の記述が苦手な学生も生き生きとパフォーマンスする様子が見られたり、チームワークの良さが伺えたりと学生の満足度が高いプログラムであった。

3. 考 察

2020年度の在宅看護学領域における遠隔実習において、学生たちのコミュニケーション能力を高め、学生同士の学び合いを重視したプログラムを作成した。当初は、遠隔実習に不安を感じ、緊張していた学生たちが回数を経るごとに主体的にグループワークやカンファレンスの進行を行い、成長する

姿を目の当たりにした。また、最終日には、グループで「気づき」を共有し、学生たちが自らの力で学びを深めることができた。教員は基本的な知識を与える講義形式の授業が中心となりがちだが、学生たちの学び合いの機会を設け、自ら成長しようとする力を引き出す演習形式の授業や実習も、重要な教育の方法であると考ええる。

上田ら(2018)は、ICTを活用した看護教育において「学習目標・教育内容・評価方法の3要素を含むインストラクショナル・デザイン」を基盤にした教育方法が有用であることを示唆した。また、対面授業からオンライン授業への切り替えに際して「コミュニケーション」が要となり、「学生同士の学び合う機会を構築する」ことの重要性(山本2020)を述べている。

また、森貫(2016)、関川(2016)は、在宅看護論実習において地域包括ケアを学び、協働する能力やコミュニケーション能力の重要性について記述している。

今回の実践を通して、ICTを活用した遠隔実習においても、実習目標から、遠隔実習と臨地実習の教育内容を統合してデザインし、一貫した評価方法を用いる授業設計が効果的であることや、アクティブラーニングの手法を用いてコミュニケーション能力の向上や学生同士の学び合いが可能となることが示唆された。

4. ICTの活用の具体的提案

(1) 繰り返し視聴が可能なオリエンテーション資料の作成

実習施設が20か所にもおよび、それぞれ持参物品や経路、開始時間、実習の詳細な方法、などが異なっている。これまで、紙媒体でのオリエンテーション資料を作成しており、教員が説明を行っているが、時折、理解不足の学生が見られる。今回は遠隔でのオリエンテーションとなり、繰り返し視聴できるように動画やPowerPointで作成した資料が効果的であった。今後も、同様の資料を作成し、e-learning上に配布することを検討する。

これは施設の指導者のオリエンテーションでも活用できる手法であり、すでにPower Pointでオリエンテーション資料を作成している施設にとっては比

較的障壁の低い方法であるが、そうでない場合も多いため、環境整備や技術支援が必要である。

(2) 主体的な学びを支援する教材の配信

在宅では教員が複数の実習施設担当し学生はステーションのスケジュールに沿って訪問するためタイムリーな個別指導が難しい状況がある。学生のニーズに応じた教材開発は今後の臨地実習において効果的であると考ええる。

今後は、看護過程のポイントや制度の理解など10分程度の教材を音声入りのPowerPointやYouTubeで作成し、学生が視聴したい時に自由に視聴できることも検討したい。

(3) 遠隔カンファレンス

臨地実習での学生カンファレンスのスケジュール調整は大変難しいが、遠隔でのカンファレンスや、最終のまとめの発表なども工夫により遠隔での実施が可能となると考えられる。

5. 今後の課題

今後の実習におけるICTの活用の具体例として(a)繰り返し視聴が可能なオリエンテーション資料の作成と配信(b)いつでも視聴可能な10分程度の教材の作成と配信(c)遠隔によるカンファレンスの実施などが効果的であると考え、今後も継続的にICTの活用を検討していきたいと考える。それらの実現に向けた今後の課題として、施設でのWi-Fi環境の整備やプライバシー保持のためのルール作り、指導者や学生の情報リテラシー教育が必要となる。

おわりに

今年度初の試みである遠隔実習において、学生の実習目標の達成がなされた。学生からは、当初は不安の声が聞かれたが、最後には、不安は軽減し、満足感や達成感が示された。また、教員にとってもICTを活用した看護教育の新たな可能性を見出す機会となった。在宅看護を取り巻く厳しい状況の中で実習の受け入れを継続的に確保することは容易ではない。我々教員は実習指導者や療養者との信頼関係を重ね、2025年問題を目前にした社会のニーズ

にえられるよう ICT を効果的に活用しながら学生の学びを支援していきたいと考える。

《引用文献》

厚生労働省 (2019) : 「看護基礎教育検討会報告書」
2019 10 月 15 日 発行 https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html (2020/8/1 閲覧)

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課
(2002) : 「国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－」(日本語版) のホームページ掲載について、
平成 14 年 8 月 5 日 発行
<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0805-1.html> (2020/8/1 閲覧)

文部科学省 (2020) 「新型コロナウイルス感染症対策のための学校の臨時休業に関連した公立学校における学習指導等の取組状況について」令和 2 年 4 月 21 日 発行 https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00007.html (2020/8/1 閲覧)

森貫詩乃, 田中博子 (2016) 「看護基礎教育における地域包括ケアを担う次世代看護師養成の現場－在宅看護学実習 学びのレポートの分析からの考察－」, 帝京科学大学紀要, Vol. 1, pp.171-174.

二瓶裕介, 加藤貴司, 西牧可織 (2020) 「北海道医療大学のライブ配信による遠隔授業の取り組みと課題」, 大学教育と情報, Vol. 1, pp.11-16.

岡田宏基, 坂東修二, 荒木伸一, 市原多香子, 黒滝直弘, 上田夏生 (2020) 「パンデミック下の医学教育－現在進行形の実践報告－オン・デマンド講義配信を用いた香川大学医学部での試み」, 医学教育, Vol.51, (3), pp.228-230.

関川久美子, 田山友子, 峰村淳子 (2016) 「在宅看護論実習における地域包括センター実習の学習効果－実習記録からの分析－」, 東京医科大学看護専門学校紀要, Vol. 25, (1), pp.45-50.

清水 準一, 柏木 聖代, 川村 佐和子編 (2017) 『在宅看護の実習ガイド』, 日本看護協会出版会.

上田伊佐子, 森田敏子, 小林郁典, (2018) : 「インスタクショナル・デザインを基盤にした ICT 活用によって看護学の教育方法が変わる」, 大学

教育研究ジャーナル, Vol. 15, pp.1-17.

山本敬之, 岩崎智明, 柴田啓 (2020) : 「関西大学のオンラインを活用した授業の取り組みと課題」, 大学教育と情報, Vol. 1, pp.2-10.

(受付日: 2020年11月5日、受理日2020年12月24日)